氏 名	佐々木　玲仁

（論文内容の要旨）

本論文は，心理臨床の現場で心理療法の技法や心理アセスメントとして用いられている風景構成法はなぜ臨床上有効なのかという問題意識の下，この技法の機序についての検討を加えたものである。

序章では，風景構成法の研究を様相研究と機序研究に分け，双方ともがバランスよく行われることが重要であるのに機序研究の数は少ないことを指摘し，（1）機序を知ることによってより有効に風景構成法を用いられるようになることが期待できる（2）臨床現場での近接領域の実務家や他分野への研究者へこの機序を明確に示すことで心理臨床現場で生じている事象についての理解が促されることが期待できる，という 2 点から機序研究の必要性を主張している。

第１部　「風景構成法研究の概観と方法論」

第 1 章において風景構成法の機序について論ずるための基礎として，風景構成法とはどのような技法であり，どのような特徴を持っているのかについて論じている。

次に，第 2 章において先行研究の概観を行ない，風景構成法についてこれまでどのような研究が行われてきたかについて「技法そのもの」「他の技法との関連」「様々な描き手」に分けて論じている。さらに，機序研究を行っていく上での重要な観点として「描画プロセス」と「複数描画の展開」を挙げ，それぞれの観点から先行研究について概観を行った。

第 3 章では，機序研究を行っていくために必要な研究法が論じられ，研究法の一般的な分類（事例研究と調査研究）とそれぞれの研究の性質について述べるとともに，新しい分類について呈示した。そして，風景構成法研究において実用性と方法論の洗練をともに満たし機序を研究するのに有効な方法は「非臨床・質的」であることが示され，質的研究法を風景構成法研究に適用するときの具体的な方法が論じられた。

第２部　「調査研究」

第 4 章「風景構成法における表現の安定性」では，同一の描き手の風景構成法表現がどのように変化しまた変化しないのかについての議論が行われ，描き手の描画について個々のアイテム等の描画表現についての安定性が検討された。このことから，風景構成法からどのようなことが読みとれるかは描き手によって異なり，この技法によって描かれる描画のどこに描き手の個性が現れるか自体も描き手の個性であることが示された。

第 5 章「風景構成法アイテムの描画時間」では，各アイテムの描画時間を測定し分析を行った。その結果，各アイテムの描画時間には一定の傾向があり，10 のアイテムは「川・山」，「田，道，石」，「家，木，人」「花，動物」の 4 つのグループに分けて考えられることが明らかになった。描画時間の長短を，描き手にかかる負荷の大小と関連付けて考えることで，アイテムの提示順序の意味や各アイテムの構造上の機能についての知見を得ることができた。

第 6 章「風景構成法における付加段階の機能」では，風景構成法の構造上の特徴の一つである付加アイテムについての検討を行った。これらを分析することによって，付加段階で描かれるものは線描段階の仕上げとして機能することも，彩色段階の始まりとして機能することもあり，線描という構成的プロセスから彩色という投影的プロセスへの橋渡しとしての働きがあることが

示された。

第７章「風景構成法に顕れる描き手の内的なテーマ」では，調査を行った８名のうち１名を取り上げ，その６回分の描画に関して質的研究法を用いて詳細に検討した。

終章「風景構成法の機序」では，これまでの議論を総合し今後の課題について検討を行った。全体を振り返り，得られた知見のまとめを行った後，これらの知見の臨床的な有用性について検討を行った。

氏 名	佐々木　玲仁

（論文審査の結果の要旨）

本論文は，心理療法において，あるいは心理アセスメントの一技法として用いられている「風景構成法」について，これがなぜ臨床上有効なのかという問題意識をたて，この技法の「機序」について，検討を加えたものである。

まず序章において，「風景構成法」に関するこれまでの研究を，この技法がどのように有効であるのかを検討した「様相研究」と，これがなぜ有効であるかを検討した「機序研究」とに分け，これまでの研究がどちらかというと「様相研究」，つまり，事例研究などを通して，風景構成法が「どのように」有効であるかを示したものが多いことを指摘した。こうした先行研究は，たしかに，「風景構成法」の有用性を世に示し，貴重な業績をなしている。しかし，「風景構成法」はどのような性質をもち，なにが有効に働く要因となるのか，という，基礎的研究もまた重要であり，本論文はそうした，「風景構成法」の基礎研究として，その意義を持つと考えられる。著者自身も述べるように，こうした基礎研究によって，（１）風景構成法がより有効に用いられ，（２）心理臨床の近接領域に働く実務家や他分野の研究者がより明確に風景構成法の有効性を理解することが期待される。

第１部では，「風景構成法研究の概観と方法論」として，風景構成法とはどのような技法であり，どのような特徴を持っているのかについて詳細に論じ，また風景構成法についてこれまでどのような研究が行われてきたかという，先行研究の概観を行っている。まず，「風景構成法」の特徴については，あらかじめすべての描画法の特徴を概観したうえで，「風景構成法」がそのなかでどのような位置づけになるのかを明確に述べている。続けて，先行研究を概観しているが，そのなかで，（１）「技法そのもの」（２）「他の技法との関連」（３）「描き手」という３つの観点から分類しなおし，「風景構成法」研究を網羅している。こうした作業は，「風景構成法」研究史の編纂ともいえるものであり，「風景構成法」のレビュー研究としての価値をもつといえよう。そして，こうしたレビューのなかから，機序研究を行っていく上での重要な観点として「描画プロセス」と「複数描画の展開」が挙げられている。本論文ではまた，研究法についても検討が加えられており，実証的，客観的な手法と，臨床的，質的な手法の双方を生かす手法が提言されている。

第２部では，「調査研究」の結果が示され，第４章「風景構成法における表現の安定性」，第５章「風景構成法アイテムの描画時間」，第６章「風景構成法における付加段階の機能」について述べられた。「風景構成法」に対するこうした細やかな数量的検討は，けっして派手なものではなく，結果として得られたことも限定的なものではあるが，こうした基礎研究を地道に積み上げていくことが，「風景構成法」という，ある種天才的な発想のなかから生まれてきた技法を根拠付けることに寄与すると考えられ，その意味で貴重な研究といえよう。続く第７章では，「風景構成法に顕れる描き手の内的なテーマ」として１名を取り上げ，その６回分の描画に関して質的研究法を用いて詳細に検討しており，「風景構成法」に対する数量的検討だけではなく，質的なアプローチによる補完をおこなっている。

「風景構成法」の機序をとらえようという果敢な試みではあるが，本論文で示しえたのは，その端緒にすぎず，こうした研究が実際の臨床場面での「風景構成法」の使用にどのように寄与す

るのかといった点については十分に明らかにされたとはいえない。こうした不十分な点についての指摘を受けたが，「風景構成法」のこれまでの研究を精査し，これを根拠づけようとした本論文の意義を損なうものではないと考えられた。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成 21 年 3 月 19 日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。